# 太宰府にまつわる物語 ―能―

## 1 能とは ―その歴史―

日本が誇る伝統文化の一つとして知られている能。そのルーツは、奈良時代のはじめにシルクロードを経由して中国から渡ってきた「散楽」とされ、平安時代になって散楽に滑稽な動作や曲芸が加わった「猿楽」が、今日の歌舞劇である能になりました。

室町時代になると、能は観阿弥、世阿弥親子によって大成します。それまでの能の謡（登場人物のセリフなどのこと）はメロディー中心でしたが、観阿弥は当時流行していた曲舞（鼓に合わせて謡いながら扇を持って舞ったもの）を取り入れ、改革を行いました。また、1374（応安7）年には京都・今熊野で行った猿楽能を、時の将軍足利義満が見物、それを契機として観阿弥が率いる結崎座（のちの観世座）を庇護するようになります。息子である世阿弥も将軍義満や歌人二条良基の寵愛を受け、和歌や連歌などの古典の知識や教養を身につけ、能をより「幽玄」なものに高めていきました。

時の権力者による能の保護は江戸時代まで続きます。豊臣秀吉は熱狂的に愛するあまり、自らも能を舞ったといい、江戸幕府を開いた徳川家康も能を保護しました。特に室町時代からある大和四座（奈良を中心に活躍した結崎座・外山座・坂戸座・円満井座）と喜多流の「四座一流」は江戸幕府の式楽（儀式用の芸能）と定められました。その後明治維新によって幕府が倒れ、庇護者がいなくなったことで廃業・転業した能役者たちもおり、狂言方（間狂言を担当）や囃子方（笛、小鼓、大鼓、太鼓をそれぞれ担当）などでは断絶する流派もあったそうです。しかし明治政府の外交政策による後援もあり、伝統的芸能の一つとして現在にいたるまで存続しています。そして能と狂言を包含する「能楽」として重要無形文化財になっているほか、平成20（2008）年にはユネスコの無形文化遺産に登録されています。

## 2 太宰府が舞台の物語

能には多くの曲目があり、現在も上演されているものから、めったに上演されないもの、すでに廃曲となったものなどさまざまです。また、演じる流派によっても曲目名や内容が違うものもあります。ここでは、太宰府が舞台となる作品を紹介します。

### （1）老松

菅原道真公を語る上で欠かせない話として、飛梅伝説があります。京の屋敷にあった梅が、道真公を慕って一夜のうちに太宰府まで飛んできたというものです。道真公を慕って飛んできたのは梅だけでなく、松も追いかけてきたと言われており、この松を題材にした作品が「老松」です。

梅津何某という人物が北野天満宮に参詣したところ、「筑前の安楽寺に参詣せよ」という夢のお告げがあったのではるばる太宰府までやってきます。そこで出会った老人と男に道真公ゆかりの梅と松について尋ねると、老人はこの地では飛梅を「紅梅殿」と呼び敬っていること、老松も神木となっていることを語り、自らは老松神、男は紅梅殿であることをほのめかして姿を消します。里人の勧めで梅津が松蔭に旅寝していると、さきほどの老人が老松神の姿で現れ、客人である梅津をもてなそうと舞を舞い、御代が「千代に八千代に」永遠であるよう祈るのでした。

長い年月を経た「老松」は、人物や組織の末永い繁栄を願う象徴であり、春に先駆けて咲く梅も登場することで、よりいっそうめでたさを感じる作品となっています。伝説の松はやがて枯れ、その代松が実際に太宰府天満宮にありましたが、こちらも現在は枯れてしまい残っていません。

この作品は、作者が世阿弥と言われており、現在まで絶えることなく上演されてきた作品の一つです。

### (2) 藍染川

光明寺の前を流れる藍染川が舞台となった作品があります。

昔、太宰府天満宮の神官が京へ上ったとき、梅壺という女性と恋に落ち、梅千代という子を授かりましたが、神官は太宰府へ帰ってしまいます。年月を経て、成長した梅千代を父親に会わせようと筑紫までやってきた梅壺は宿の人に神官への手紙を託しますが、折り悪く神官は不在。代わりに受け取った神官の本妻は手紙を読み、親子を会わせまいと神官に成り代わって偽の返事を書き、すぐさま京へ追い返そうとします。偽の手紙を読んだ梅壺は悲しみのあまり、梅千代を残して藍染川に身を投げて死んでしまいました。

梅千代が母の亡骸にすがって泣いていたところ、偶然にも神官が通りかかりました。梅千代の手には母からの遺書があり、その中身を読んだ神官は、身投げした女性が昔契った女であったこと、そして梅千代が我が子であることを知り、梅壺の蘇生を天神様に祈りました。すると天神様が現れ、梅壺は息を吹き返したのでした。

藍染川と梅壺侍従蘇生碑

『筑前国続風土記拾遺』には、光明寺の項目に謡曲「藍染川」のあらすじが記されており、物語に登場する神主は中務頼澄とあります。また、藍染川をさす「染川」について、「鐵牛の母堂辨君身を投られし所といふ」とあり、女性についても「梅壺」のほかに「辨君」という名前も伝わっているようです。一説によると、息を吹き返した梅壺は出家して尼となり、今福という所に庵を結んで一生を送り、梅千代も後に出家したと伝わっています。光明寺を創立した鉄牛円心は、出家した梅千代とも言われています。

現在の藍染川は小川になっていて、川の傍らには「梅壺侍従蘇生碑」が建っており、この地が舞台となった恋の伝説を今に伝えています。

### 3 おわりに

謡曲の中には、ここで紹介したもの以外にも太宰府が舞台となる作品や、太宰府からやってきた人物が登場する作品が存在します。見知った場所が作品の舞台となっていることもありますので、この機会に能に触れてみるのはいかがでしょうか。

参考文献


『太宰府市史　民俗資料編』　太宰府市史編さん委員会 /1993
『太宰府伝説の旅』　大隈和子 /1989
『能鑑賞二百一番』　金子直樹 /2008
『新編日本古典文学全集 58　謡曲集①』　小山弘志・佐藤健一郎校注 /1997
『能をよむ①　翁と観阿弥　能の誕生』　梅原猛監修 /2013
『筑前國続風土記拾遺（上）』　青柳種信編　広渡正利校訂 /1993


## コラム　能をもっと知る

能の題材には、歴史上の事件や人物、神話や説話、伝説などが多く用いられています。これは観客に、その話の背景となる世界を想像させやすくするためと言われています。題材となる典拠は『古事記』や『日本書紀』、『万葉集』や『後撰和歌集』、『伊勢物語』、『源氏物語』、『平家物語』とさまざまです。

曲数の多い能は、その内容で分類することができます。神社などの縁起を語ったり、神が主人公となって人々の幸福を祈る「初番目物」、源氏や平家の武将を主人公として死後も苦しむ様子を描く「二番目物（修羅能）」、『源氏物語』などの王朝文学に登場する優美な女性たちが主人公の「三番目物（鬘物）」、物狂いや執心、怨霊など他のジャンルに属さない「四番目物（雑能）」、鬼や龍神を主人公に派手な演出や動きの多い「五番目物（切能）」という分け方は、江戸時代から続く正式な能の上演形式にそった「五番立」という分類方法であり、作品の内容が分かりやすいことから、現在でも活用されています。

（太宰府市文化ふれあい館　学芸員 後藤夏実）

平成31年3月26日発行　太宰府市文化ふれあい館　〒818-0132 福岡県太宰府市国分四丁目9番1号 TEL 092-928-0800

※「逢知の栞」には、文化ふれあい館に集う人々が歴史や文化に触れ、様々な知的めぐり逢いがあるようにという願いが込められています。